

第8回全国LD親の会公開フォーラム

一人一人のニーズに応じた 特別支援教育の実現を目指して

—連携の現状・課題・展望—

分科会報告書

2009年6月21日

ドーンセンター

(大阪府立男女共同参画・青少年センター)

特定非営利活動法人 全国LD親の会

【分科会開催要項】

日 時： 2009年6月21日（日）

14:30-16:40（開場14:15）

会 場： ドーンセンター（大阪府立男女共同参画・青少年センター）

特別会議室（5階）・大会議室（5階）

大阪府中央区大手前1丁目3番49号 TEL 06-6910-8500

<交通>

京阪天満橋駅・地下鉄谷町線天満橋駅：1番出口から東へ350m

JR東西線大阪城北詰駅2号出入口から西へ550m

特別会議室

分科会 1 個別の指導計画の作り方ー通常の学級の場合ー
森田 安徳 （吹田市教育委員会）

大会議室

分科会 2 個別の指導計画に生かす作業療法の活用
ー通常の学級での学習面と生活面の具体的援助についてー
辻 薫 （大阪府作業療法士会）

主催：特定非営利活動法人 全国LD親の会

後援：文部科学省、厚生労働省、大阪府、大阪市、大阪府教育委員会、大阪市教育委員会、堺市教育委員会、滋賀県教育委員会、京都府教育委員会、奈良県教育委員会、和歌山県教育委員会、兵庫県教育委員会、京都市教育委員会、神戸市教育委員会、日本LD学会、日本障害者協議会、(財)日本障害者リハビリテーション協会、日本発達障害ネットワーク、NPO法人アスペ・エルデの会、NPO法人エッジ、NPO法人えじそんくらぶ、社団法人日本自閉症協会、NHK厚生文化事業団近畿支局、(社福)朝日新聞厚生文化事業団、(社福)産経新聞厚生文化事業団、(財)毎日新聞大阪社会事業団、(社福)読売愛と光の事業団

事務局：

〒151-0053 東京都渋谷区代々木 2-26-5 パロール代々木 415

TEL/FAX：03-6276-8985 E-MAIL：jimukyoku@jpald.net

URL：http://www.jpald.net/

「個別の指導計画の作り方ー通常の学級の場合ー」

森田 安徳(吹田市立教育センター)

本日の研修の目標は、「個別の指導計画を書くなんで、めんどうだな!!!」と思うところから、「個別の指導計画を書くことは、すこしおもしろそう。やってみようか」と感じていただくことでした。

個別の支援計画、子どもの全体理解について簡単にふれたあと、個別の指導計画の作り方を、ワークを中心にお話ししました。私の個別の指導計画の考えは以下の通りです。

あなたが、今、理解している子どもの実態以上の個別の指導計画は作れません。
子ども理解が十分でないと、個別の指導計画はうまく作れません。
子ども理解が何よりも大切です。

ワークは5種類考えましたが、時間の関係で4つを行いました。ここでは2つ紹介します。

ワークは2～3人で行いました。話し合う上で大切なことは、①話し合う時間を決める、②記録・司会・(発表)を決める、③正解はない。いろいろなアイデアを出し合う、という3点です。

ワーク1 個別の指導計画はなぜ、必要か？

1. 保護者の願いをもとにする
2. 保護者と一緒につくる
3. 客観的な実態把握ができる
4. 目標が文章化で明確になる
5. ひとり一人に合った指導ができる
6. 子どものできないことに支援できる
7. 指導者の方針がぶれない
8. 一貫した支援ができるように
9. 引き継げるように
10. 学校全体で共通理解するために
11. 先生の力量アップ
12. うまくいかないとき立ち返る
13. 評価につなげて、次の支援を考える
14. 子どもに目標を知らせ、子どもにとっても見通しがもてる
15. 外部機関との連携のツール

以上の15点ができました。大切な点は出ていると思います。加えて、「なぜ、保護者のニーズを聞くのか、なぜ、一貫させた指導をするのか」の意味を考えていく必要があると思います。

ワーク3 算数、かけ算のテスト48点。A君は何ができて、 なにができていない？

この課題は、算数のかけ算テスト(100問)の解答をみて、子どもの誤り傾向を考えるワークです。48点は得点としてはよくないのですが、答案を見ると子どもたちが苦しんで、努力して、何とか答えを書こうとしている様子がよくわかります。個別の指導計画を書こうと思えば、これらの子どもたちの「困り感」に気づくことが必要です。

答案を見て子どもの課題を明確にするため、次の内容を提案しました。

- 1 What:何ができているか、できていないか。
どのくらい(量)できているか
- 2 how :どのようにしているか。
- 3 Why :なぜできていないのか

ワークの結果は次の通りでした。

1. 100問の内、最初の30問はほぼできている。30問からは極端に解答を書く量が少なくなっている。

これは大切な観察です。ここから何が考えられるでしょうか。彼はかけ算ができないのではなく、30問まではほぼ全問正解に近くできています。でも30問で力つきた印象です。集中がきれたと思われま
す。ここまでの観察ができると支援方法は簡単に考えられます。

2. 5の段と9の段はほぼできている
3. 8の段が苦手である

かけ算は1から9の段、全てを間違っているわけではありません。彼ができていない段とよく覚えていない段を特定します。ここでは8の段を集中的に学習する必要があります。その時、「なぜ彼は8の段が苦手なのか」を考える必要があります。これがわかると支援方法が違ってきます。

4. 同じ数字のかけ算(3×3)はできている
5. 間違いがない

この観察は、彼の特徴をよく表しています。彼は「わかっているところとわからないところがよくわかっています」。でたらめに書くわけではありません。

課題に対してまじめに取り組んでいて、自分の苦手さもよく理解しています。支援に答えてくれやすい子どもです。

この他、個別の指導計画の書き方についてわかりにくい例から説明しました。

参加者アンケートより

保護者

- ・ どんなふうに個別の指導計画がつくられていくのかがわかりとても参考になりました。

行政関係

- ・ 森田先生の講演は具体的に考えるワークショップをもとに指導・支援のあり方を考えるということで非常に有益でした。

教育関係

- ・ 森田Tの分科会の内容はワークも豊富で支援学校の教員としても大変参考になりました。
- ・ 個別の指導計画はなぜ必要か？と考えることはすごくよかったです。私の勤務校では、教員一人ひとりの発達障害に対する理解もなく、教員に対する研修も行われていません。一人の子どものために何ができるのかを考えていくことを、自分自身続けながら勤務校での特別支援教育が進むようにがんばりたいです。
- ・ 個別の指導計画をつくるにあたって中学校の具体例があまりにも少なく個々の生徒への対応についても資料が欲しいと思いました。
- ・ 分科会は両方とも関心があり、まよいました。でも今日のお話はとても具体的でよくわかりました。どう生かし、学校でどう実践していくかが自分の課題だと思いました。(とにかく具体的に示すことが大切だと思いました。)ありがとうございました。
- ・ 森田先生の内容は具体的で分かりやすく、なる程と思うことばかりでした。個別の指導計画について、もっと積極的にかけるようになったと思います。ありがとうございました。
- ・ 分科会はワークだったのでたいへん楽しく参加できた。また、参加したいです。
- ・ ワークでまず自分で考えてみることで頭に入りやすかった。個別の指導計画の手だてを具体的に書くということが具体例をあげて説明されたのでよくわかった。
- ・ 森田先生、個別の指導計画の意義、書き方を今後、他の教師にどう伝えるかも私たちの課題です。少しでも上手に伝えていけそうです。ありがとうございました。なにより森田先生の温かい人柄で和やかな会場がよかったです。
- ・ 初対面の保護者の方、先生方の意見を聞いたり、話し合いをしたりする中でもっと勉強が必要だと思いました。
- ・ 分科会での森田先生のご指導がとてもよかったです。もっと具体的に子ども行動をメモにとり、有効的な目標をしっかりと考えて、日々指導していきたいです。できないことに目がいていましたが、何ができるのかと見てやることや、計算の分析のように、ていねいにできることできないことをわかってあげることが大切だとよくわかりました。ありがとうございました。
- ・ 森田先生の個別の指導計画の作り方では、豊富なワークで、その子の実態に具体的に迫ろうとする内容だったと思います。次につながられるのではないかと感じています。
- ・ ワークを入れながら、いろいろ教えていただきとても参考になりました。まだ個別の指導計画を書いたことがないので、とりあえずできるところから(低いレベルでも)文章化し、作ってみようと思いました。ありがとうございました。
- ・ 具体的でとてもわかりやすかった。できるだけ日々に生かしていきたい。課題のたて方はやっぱりむずかしい！です。
- ・ 個別指導計画はとても難しいものと思っていましたが、子ども理解をしていくことを大切にすれば、楽しく作成できるようになると思いました。

「個別の指導計画に生かす作業療法の活用」 ー通常の学級での学習面と生活面の 具体的援助についてー

辻 薫(大阪府作業療法士会事業部発達部門)

参加者 保護者21名、教員21名、作業療法士一般申し込み7名、学生1名、運営協力作業療法士 26名
合計76名。

1. 運営協力者名簿(作業療法士 合計 26名)

永井 洋一 大野 裕子 出 香洋子 大西 美智枝 中島 るみ 小林 哲理 西川 京子
澤田 麻理 斉藤 一実 浅野 裕加子 高濱 裕美 上野 涼子 桑原 直美 芳本有里子
岩城 嘉子 加藤 巧 西川 佳奈子 三浦 正樹 木村 基 森田 傑 中田 有里
多羅尾めぐみ 立山 清美 嶋谷 和之 辻 薫

2. 企画協力主旨

- ・ 大阪府下の支援学校では「福祉人材等活用事業」で作業療法士をご活用いただく機会も年々増加し、今年度はある地域の教育委員会と支援学校だけではなく、支援学校と地域との連携支援活動にも携わる研究活動を開始した。
- ・ さらに、特別支援教育における専門家との連携は、「通常学級での支援」に、いかにつながるかが課題となってきた。今回のフォーラムでも「個別の指導計画」の作成と実施の普及啓発がテーマになっており、作業療法士も次段階とし通常学級での支援体制づくりに携わる必要がある。
- ・ しかし、実状として作業療法を受けているケースでも「作業療法で何が得られているのか」保護者から学校の先生にうまく伝えられない場合があり、学校の先生には「作業療法士は何をする専門職かよくわからない」場合も多い。
- ・ 作業療法士自身も学校における「個別の指導計画」についての知識を深め、文書による情報交換だけではなく「個別の支援計画」を踏まえながら、家庭と学校をつなぐ支援に踏み込む必要がある。また家庭や学校から、子どもの苦手なことだけではなく「好きなこと、得意なことは何かを」聞く・伝えてもらうことで、得意な力を伸ばす働きかけにより達成感を高める効果も期待できる。
- ・ 「特別」ではなく「必要」な支援を進めることの重要性を「チーム」で理解し、子どもの全体像を把握していく作業療法士の視点や、「何を相談するのか」「何についてアドバイスを求めるのか」を明確に伝えていくことを意識し、相談に対応できる力を養う。
- ・ 「個別の支援計画」について保護者の同意を得て情報交換することで、医療・療育機関と連携しやすくなることや、身近な地域に多くの作業療法士がいることを紹介した。
- ・ また、大阪府作業療法士会や各都道府県士会、日本作業療法士協会窓口も紹介した。
- ・ 「どういことを相談すればいいのか」という具体的なイメージを持っていただくため今回の分科会2で、「個

別の指導計画に活かす作業療法の活用ー通常学級での学習面・生活面の具体的援助について、実技体験を伴ったワークショップを実施した。

3. 結果報告

- ・ 14:30開始、16:40終了。
- ・ ワorkshopを円滑に行うため、分科会2への参加人数は70名程度とした。
- ・ 参加者は、1グループ7人程度。
- ・ 辻より、「作業療法士の作業分析の視点」と大阪府士会のパンフレットから「よくある相談」のいくつかの項目を提示。基本的な課題の分析要素を提案した。
- ・ その後「はさみが使いにくい」という相談をテーマに、全体に
 - ① 実際にハサミがうまく使えないケースがあるか？どのような状態か？」を確認
 - ② ハサミの構造と使い方を説明(作業療法士 木村氏協力)

実技内容具体案：「丸」と「星」を線にそって切り取る

- ① 非利き手で切る
- ② 指を穴の奥まで入れて切る
- ③ 厚い紙・薄い紙を切り比べる
- ④ 紙を持ち替えずに切る
- ⑤ 紙を持つ手を前にでないようにして切る
- ⑥ ハサミで紙を切らずにはさんで持っておけるか
- ⑦ 途中で切る動きを止められるか

- ・ 先の説明を踏まえ、実技体験と具体的な支援方法をグループごとに討議を行った。

以上の体験を通じて、一方的に講義形式でいろいろなHOW TOを教えるのではなく、はさみを使う体験を深く掘り下げて子どもの困難とその要因を実感し、次のステップとなる個に応じた手立てにつながる思考過程を促すことを目的とした。

各グループに配置された2名～3名の作業療法士が、実技内容説明とデモンストレーション、参加者の模擬体験の支援、体験しての振り返りと感想の確認、困難がある場合の手立てなどを補足説明した。

- ・ 各グループの話し合い結果を記録してもらい、時間の都合上、あらかじめ決められた課題で分担した各グループに発表してもらった。
- ・ ただし、各グループのすべての討議内容の記録は保管するため、各グループに一人、当書記をお願いした。
- ・ 辻・嶋谷は、全体を巡回して、それぞれの進行をサポートした。
- ・ 今後、各地のLD親の会開催予定の研修会の開催候補地である新潟県(2名)と佐賀県(1名)の作業療法士にも保護者会との今後の連携と協力のため大阪モデルを見学してもらった。

参加者の体験についての報告と感想:

実際にはさみをうまく使えないケースについての実態:

- ・左利きなのに右手用はさみを与えていた
- ・線に合わせて切れない
- ・力が入りすぎる
- ・歯が内側に向いてしまう
- ・切り口がぎざぎざになる
- ・まっすぐ切れない
- ・切っていると姿勢がくずれる
- ・紙の種類によって切れないものがある
- ・疲れやすい
- ・時間がかかる
- ・小刻みに開閉する
- ・紙が折れ曲がる
- ・はさみを握りこんでしまう
- ・はさみを開くとき口もあいてしまう
- ・形を切れない
- ・ゆっくり切れない
- ・紙の回し方がわからない など

利き手でない手で、はさみを持って紙を切る体験の感想:

- ・疲れた
- ・いらいらする
- ・力の調整が難しい
- ・いつもと切る位置が変わる
- ・スピードが遅くなる
- ・じっくり見ないと切れない
- ・どこを持つかしばらく考えた
- ・はさみの動き方の感じがわかりにくかった
- ・反対の手で使いながら見ると線が見えにくい
- ・肩に力が入る
- ・切り口がぎざぎざになった
- ・引っかかる感じがした
- ・目が痛くなった、
- ・指が緊張して伸びてしまった
- ・指がすかすかした
- ・紙を持ちにくかった
- ・体が傾いた

これって、まさに子どもたちの困難の様子とオーバーラップしますよね！

タイムスケジュール

時間	内容
12:45～	集合 ドーンセンター 5階 大会議室 事前打ち合わせ
13:30～	会場設営—グループ形式に
14:15～	分科会会場 開場
14:30～	分科会スタート 辻
14:55～	木村 使いやすい文房具紹介
15:00～	実習スタート 「ハサミが使いにくい」
16:00～	代表グループから実習の討議内容を報告
16:15～	まとめ(辻)
16:20～	質疑応答
16:40	分科会終了

参加者アンケートより

保護者

- ・子どもの困難が体験できてよくわかった。
- ・作業療法を受ける場の提供をお願いしたい。
- ・分科会2のワークショップはとてもわかりやすく楽しく勉強できました。
- ・分科会2のワークショップでは、子どもが困難に感じていることを実際に体験でき、貴重な体験をすることができました。

行政関係

- ・ぜひ OT を学校教育に生かせたらと思います。

教育関係

- ・大阪の市町村や他府県など、数名の教師から同様の内容で研修希望の相談があった。

作業療法士

- ・同じ場で保護者さんや学校の先生と意見交換しながら、作業療法の視点や支援について説明し、お役に立てたことがよかった。講義形式だけでなく、参加型学習がそれぞれの学びにつながり効果的だと思った。また機会があれば参加する。



分科会1



分科会2

特定非営利活動法人



全国LD親の会